どのように死を迎えるべきか

座長

◉ 長尾 和宏

医療法人裕和会長尾クリニック

講師略歴

◉ 石飛　幸三

世田谷区立社会福祉事業団　特別養護老人ホーム　芦花ホーム

1935年広島県生まれ。1961年慶應義塾大学医学部卒業。
消化器外科専攻、その発展の為に血管外科の必要性を感じて1970年から、ドイツ、フェルディナンド・ザウアーブルッフ記念病院で血管外科医として勤務。
1972年より東京都済生会中央病院で血管外科の応用手術に励むとともに、30年間に渡って脳梗塞の予防を目的とする頸動脈内膜摘除術、野球ピッチャーの血管損傷の手術法の発展に寄与した。
老衰へどこまで医療が介入すべきかを考え、10年前より特別養護老人ホーム芦花ホームに勤務し、現在に至る。

著書
平穏死のすすめ（講談社）、「平穏死」という選択（幻冬舎ルネッサンス）、「平穏死」を迎えるレッスン（誠文堂新光社）など。

所属学会
日本外科学会　血管外科学会　等

超高齢社会が到来して今我々は、人生の終焉に対する医療の意味を考えなければならなくなりました。自然な最期は本来穏やかなのです。それなのに現代の我々は自然に逆らって、高々人間が考える科学、医学で、自然の仕組みを変えようとしています。平穏な最終章を混乱させているのです。

死なせてはいけない、医療で命を伸ばせるのならしなければならない、何もしないことは見殺しにすることだと思っているのです。

そうでしょうか。もう水分も栄養も受け付けないのに、無理に点滴で水分栄養を入れたり、胃瘻という方法があるから、命を伸ばせるからといって、本人に苦しい思いをさせているのではありませんか。医療は人のためになってこそ医療です。我々は、この本来の医療の意味を取り違えていないでしょうか。

最期に体はもう生きることを終えようとします。食べたくなくなります。無理に食べさせようとすると誤嚥します。肺炎を起こします。本人は苦しむので放っておけません。救急車を呼んで病院に送ります。肺炎を治しても食べられないことに変りはありません。このままでは死んでしまう。何かしなければと焦ります。胃瘻をつけます。胃瘻をつけられて、ただ口だけ開けて、魂を抜かれて手足が拘縮してきます。これは一体誰の人生なのでしょう。誰がこんな最期を望んだでしょう。これは進歩でしょうか。こんな文化が人類史上にあったのでしょうか。

医学は人のためになってこそ意味があります。命を伸ばす方法、医療というものがあるのに、それをしないことは不作の殺人だと言って、まるで医療が我々をどこまでも生かしてくれるのだと錯覚しているふしがあります。医療の意味を考えなければならない時代が来たのです。

法は国民のためにあります。従来人間はいずれ来る死を自然の摂理として受け入れて来ました。今我々は何れ終わる一回しかない自分の人生を考えなければならないのではないでしょうか。

The 19th Annual Meeting of the Japanese Academy of Home Care Physicians

第19回 日本在宅医学会大会

大会テーマ

世界に発信する在宅医学・医療を目指して

プログラム・講演抄録集

平成29年

6月17日(土)▶18日(日)

名古屋国際会議場

大会長

葛谷 雅文

名古屋大学大学院医学系研究科
地域在宅医療学・老年科学分野（老年内科）教授
名古屋大学未来社会創造機構 教授